

2017年2月25日  
言語文化教育研究学会シンポジウム

# 言語教育政策研究のあり方

英語教育政策研究を事例として

関西学院大学社会学部

寺沢 拓敬

terasawat@kwansei.ac.jp

# 自己紹介

キーワード  
言語社会学

テーマ

1. 英語をめぐる世論
2. 英語教育の「制度」
3. 仕事と英語
4. 外国語教育学の方法論
5. 批判的応用言語学



<https://twitter.com/kurosiopb/status/633924369081741313>

# この話の背景

# 言語現象をめぐるポリティクスをどう分析的に理解すればよいか

ポリティクス：権力や資源に差がある諸アクターが互いの利害（象徴的利害を含む）を相互作用を通して調整する活動

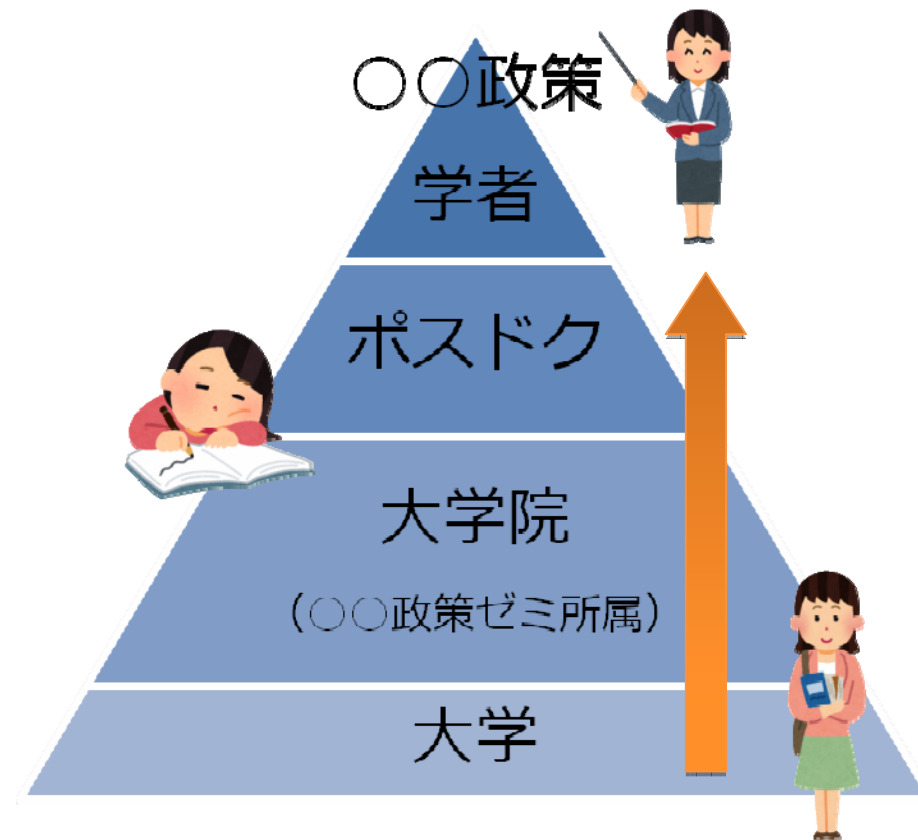
## 英語教育政策に関する研究

### 経験的研究 (empiricism) の立場から

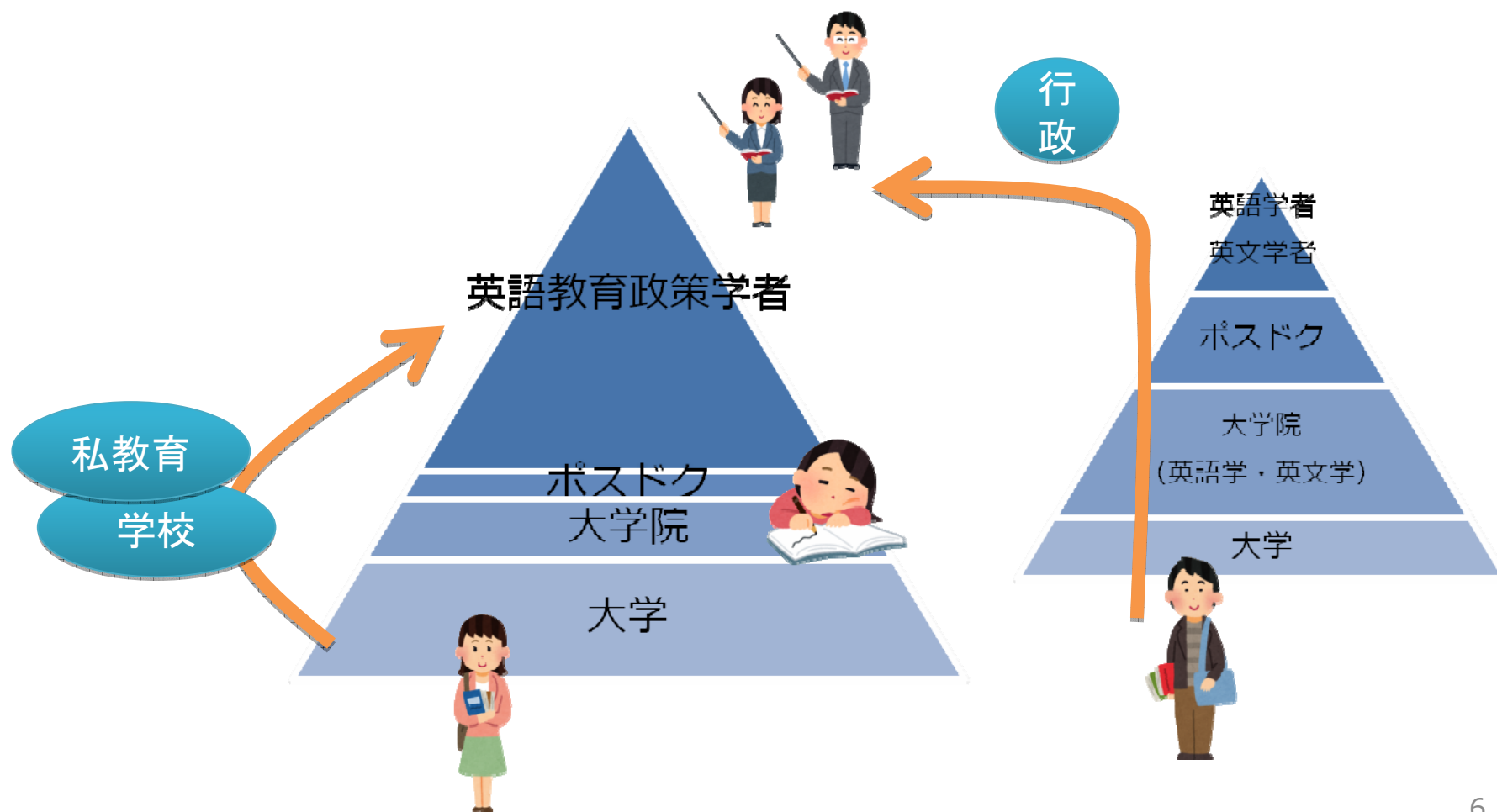
### 批判的視座

良くない政策研究はポリティクスの理解も変

# 〇〇政策学者（大学所属）のキャリアパス



# 英語教育政策研究者（大学所属）の キャリアパス



# 構成

1. 複層的な合理性に対する理解がない政策批判
2. 実態に対する真剣な検討がない「実態調査」
3. 実現可能性に関する真剣な議論の欠如

# 複層的な合理性



# 複層的な合理性とは



## ポリティクスと合理性

複数のアクターが、それぞれの合理性をぶつけながら、  
相互作用／協調／闘争する

## 各アクターの合理性を前提にすること

「文科省は〇〇に無理解」のような理解の仕方（＝分析枠組み）は悪手  
社会制度のメカニズムを理解するうえで不可欠

「非合理的に見える他者にも合理性がある／自身の合理性にも非合理性がある」という事実を受けれる（※「みんな仲良く」的道德スローガンではない）

## 合成の誤謬／パラドクス

ミクロの合理性が集まってもマクロ的には合理的にならない。

関係者個々の合理的判断→全体としてはきわめて無理筋な政策に

財界・政治家・一般市民  
効果的な英語教育のために教育開始を早めたい



財務省  
予算は無駄なく配分したい・不要な予算は切り詰めたい



文科省  
新規施策で予算を獲得したい  
限られたリソースの中で最善の政策を考えたい



支援者・研究者  
限られたリソースでも成果が出るよう支援したい



## 小学校教育現場

限られたリソースのまま新規施策の導入  
現場の教員による自己負担で補完

# 「実態」とは何か

# 英語教育界で量産される 無意味な実態調査

- アンケートをバラマキました（量的調査）
- ちょこっとインタビューしました（質的調査）
- 「実態なんて簡単にわかる」という「畏れ」の欠如



2016年8月20日  
全国英語教育学会第42回大会（埼玉）

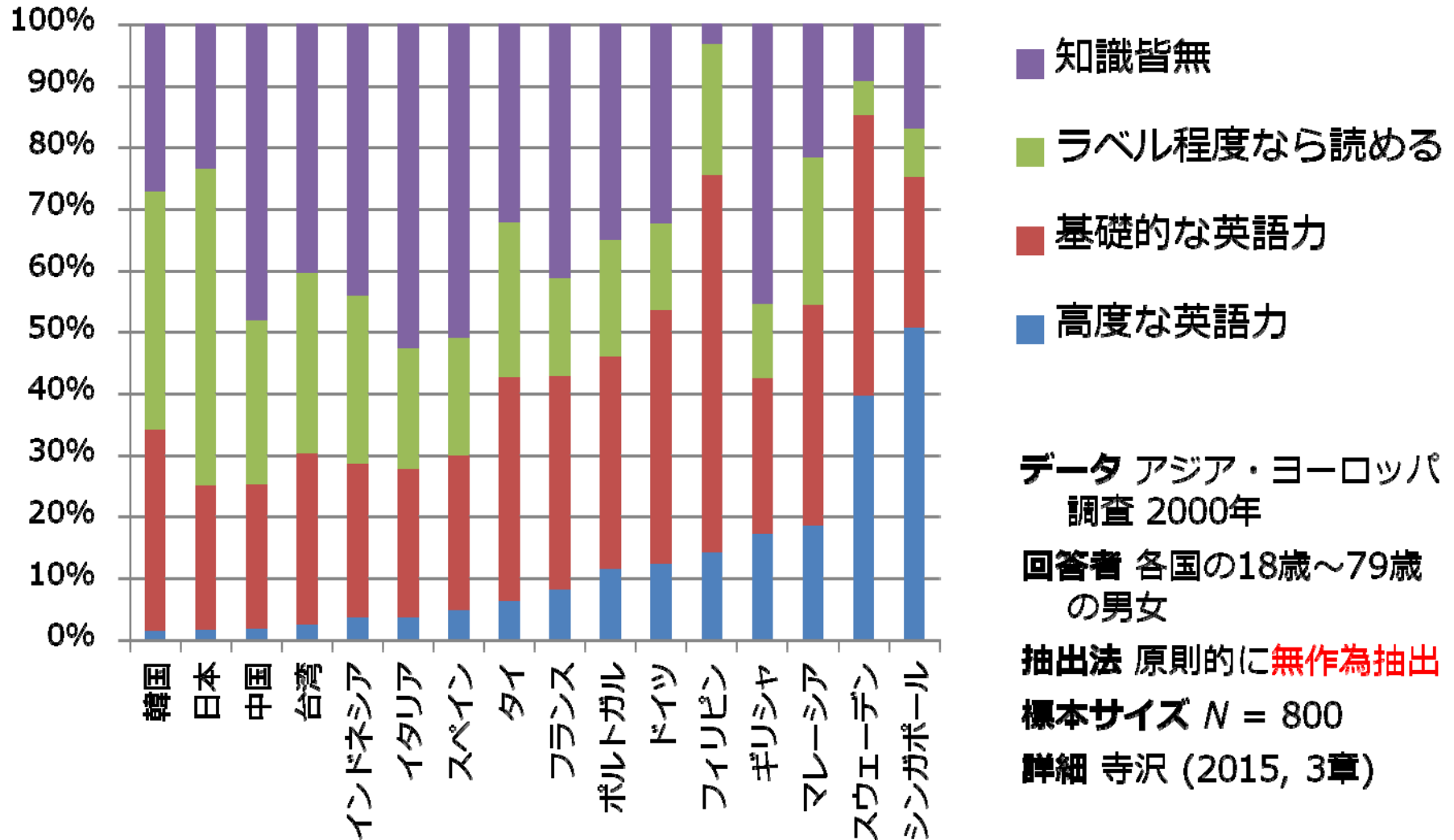
# 量的「実態」調査

## 重要原則（なぜか教科書にはあまり載っていない）

ランダムサンプリングでしか“平均的”実態  
はわからない

縁故サンプリングはどれだけケースを集め  
ようと、母集団に一般化できない  
→ 「量的事例研究」として扱うべきもの

# 「英語力の国際比較」 言説 vs. 実態



# 「英語使用ニーズ」言説 vs. 実態

Q. あなたは過去 1年間に、以下のことで英語を読んだり、聴いたり、話したりしたことが**少しでも**ありますか

**データ** 日本版総合的社会調査、2006年・2010年

**回答者** 日本全国に在住の有権者 (20-89歳)

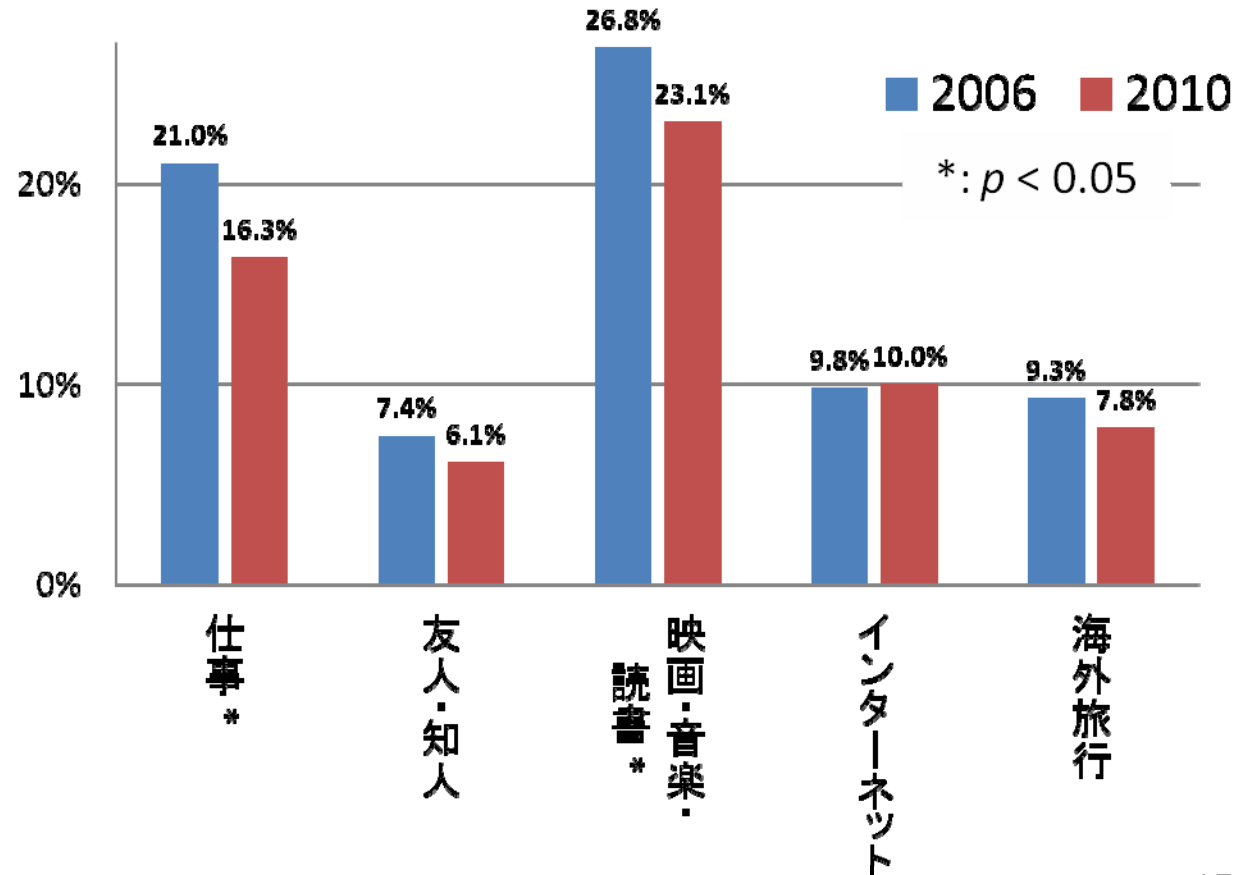
**抽出法** 無作為抽出

**標本サイズ**

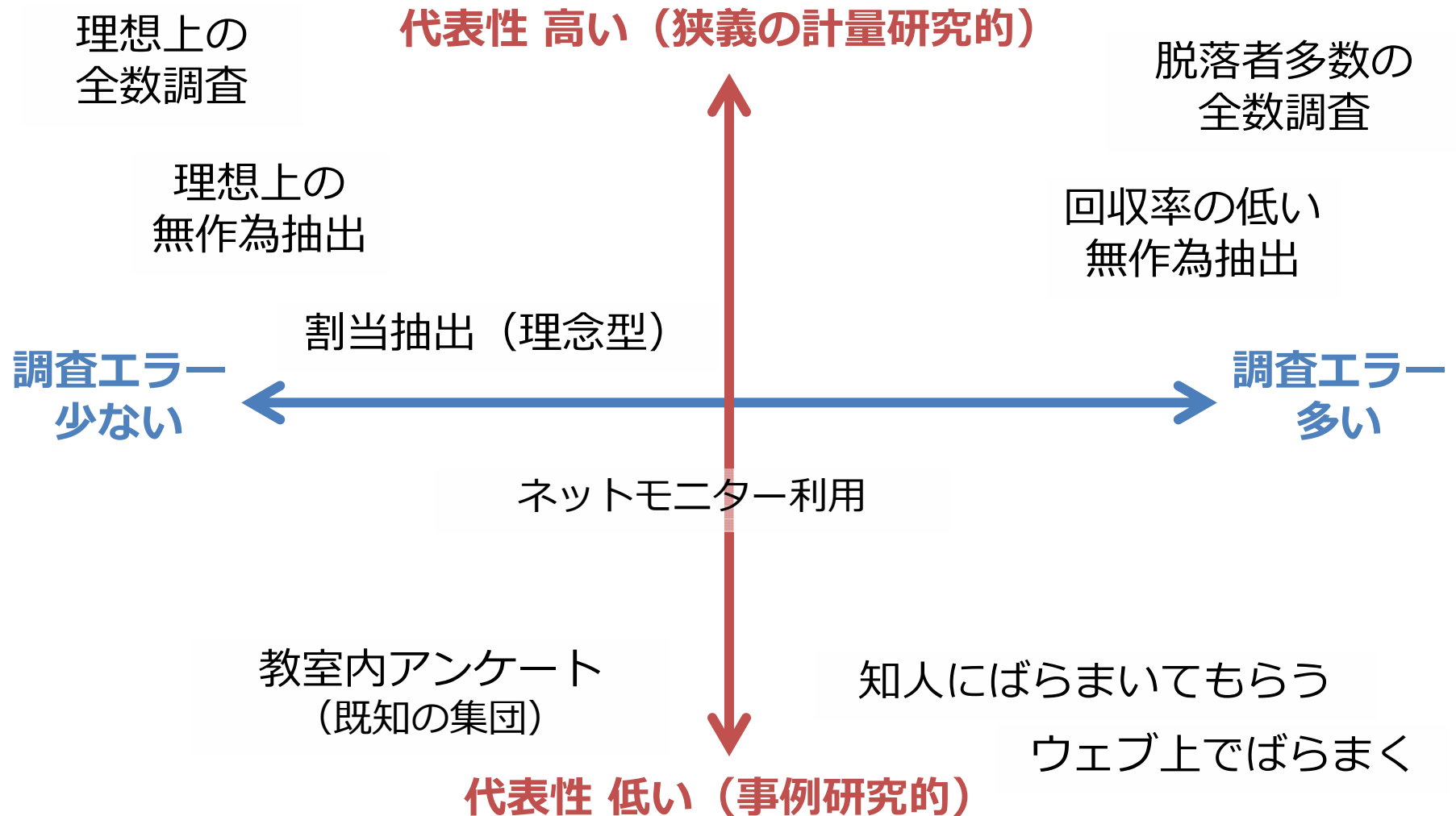
N = 8,000 (2006年)

N = 9,000 (2010年)

**詳細** 寺沢 (2015: 10章)



# サンプリングの質にはいろいろ





# 質的 “実態” 調査

# 全国英語教育学会2016年大会予稿集 質的研究（17件）の内訳（全270件中）

## データ収集法

半構造化インタビュー	質問紙調査と併用のインタビュー（混合）	出来事の振り返り（録音・筆記）	参与観察
10（件）	2	4	1

## 対象者数

1人	2-5人	5-9人	10-14人	15人以上	記載なし
2	7	4	2	2	0

## ひとりあたりの時間

29分以下	30分	31分以上	記載なし
3	3	2	9

データの量(volume)  
に無頓着な質的研究  
が多い

## 人数×収集時間×調査回数

~1.0h	1.1~4.0h	4.1~10.0h	10.1h~	計算不能
1	3	3	1	9

## 対話的収集

「データ収集と分析結果の往復運動が可能」という質的研究の最大の特長をなぜか放棄しているものが多数→面接回数「1回」が9件  
質的データ「分析法」に対する忠実さとは対照的

## 理論的飽和

理論的飽和への考慮？

なぜ n 人に、なぜ n 回の面接だったのか不明  
「最初からその予定だった」というように読める

## 理論生成に対する志向

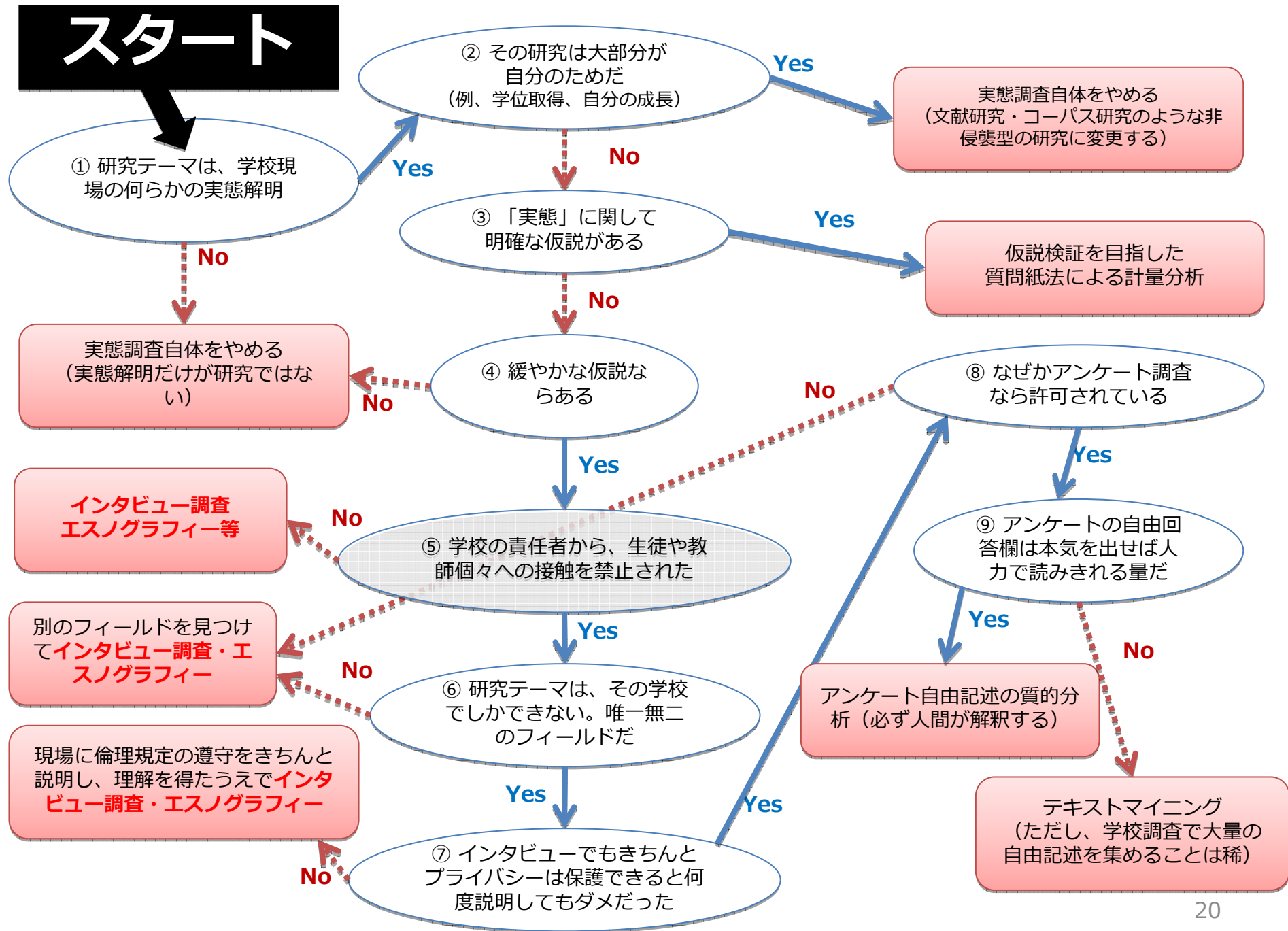
予定調和的に知見を生成して終わり？

調査結果を既存の理論（SLA理論・  
動機づけ理論等）で説明して終わり？

### 引用

**よくある誤解4** 最後の方で難しそうな概念をもってきて、調査結果に当てはめるのが分析 理論のあてはめをしてはいけない。何か既成の概念や理論を用いて、取ってつけたような印象がある場合、余計わからなくなる場合、それは分析が失敗していると考えられる。  
小田博志 2010. 『エスノグラフィー入門』 pp. 341-2.

# スタート



# 実現可能性

# FEASIBILITY

## 実現可能性 に関する議論を避けて通れない

実現可能性とは

→ 効果・有効性に関する問い（要は因果関係）

## こんな研究

いわゆる「海外の学校を訪問してみました」研究

いわゆる「関係者にインタビューしてみました」研究

## 蔓延する「示唆」語り

海外の先進的な英語教育を視察して示唆を多数挙げる

しかし、その示唆の関連度 (relevance) は無視

有用性に濃淡のある知見が「示唆」に一元化

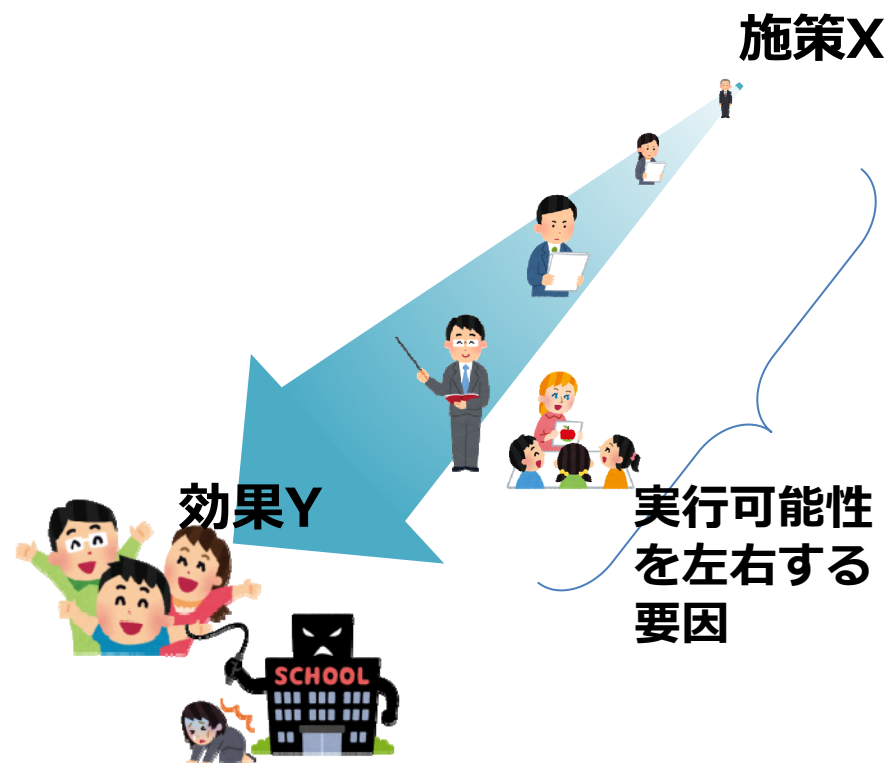
# 因果モデル

実現可能性を考えるのであれば因果モデルの自覚が必要  
「因果語りはしたくない」なら効果に関する議論は慎む

## 引用

最後に、本講演を通じて、私がどうしてもお伝えしたいメッセージを簡単にお話したいと思います。因果関係を検証することは困難であるということは間違いありません。ある結果を引き起こす原因を発見することはもっと困難です。しかし、因果関係は神秘的なものでも形而上学的なものでもありません。手順さえ踏めば簡単に理解できるものであり、親しみやすい数学言語を使って表現できるので、計算機による解析を行うこともできるのです。

Judea Pearl. (黒木学訳) 2008. 『統計的因果推論』 p. 369



# まとめ



# ポリティクスを理解するうえで 考慮すべき点

1. 複層的な合理性
2. 実態解明に対する「畏れ」
3. 実行可能性・因果関係に関する真剣な議論